

## 【一般講演2】 第6席

## 『外台秘要方』卷第三十九について

宮城 浦山久嗣

『外台秘要方』は『備急千金要方』と並んで、唐代を代表する医方書である。この書の第三十九巻は、經穴の位置と主治病證を主体とする、いわゆる「明堂書」の体裁をとっている。巻首の「明堂序」以下、鍼を廃し灸治のみとするなど、編者の明確な意図を窺うことができ、他の文献からの引用のしかたも、当時の医学思想を考える上で重要である。特に、主治病證の部分は、従来『鍼灸甲乙經』に基づくものと見做されてきたが、むしろ楊上善の『黃帝内經明堂類成』に近い内容を持っている。そしてそれは『普濟方』鍼灸門に受け継がれている。また、經穴の順次や分類は特徴的で、「明堂書」の変遷についても重要な役割を果たしている。

本発表は、『外台秘要方』卷第三十九が持つ文献的価値や編集意図を再認識する試みである。